

ゲイリー・スナイダーの詩

——山と岩の世界

佐野 博 美

序

ゲイリー・スナイダー (Gary Snyder) は1930年にサンフランシスコに生まれた。アレン・ギンズバーグらと共に1950年代の「サンフランシスコの詩のルネサンス」に参加したビートジェネレーションの詩人のひとりである。彼は日本とも縁が深く、禅を学ぶために二度（合わせてほぼ10年間）日本に滞在し、またその間に日本人の女性と結婚した。彼は現在、カリフォルニア州、シェラ・ネヴァダの山中で家族と共に原始的ともいえる生活をしている。一般人には便利で快適と思える生活形態を拒否し、電気もガスも水道もなく、日本風農家に石油ランプといろり、自家製のサウナ風呂という具合だ。

スナイダーは合衆国北西部の農場で成長した。大学では神話学、人類学、言語学、中国語等を学んだが、その間に東洋思想、特に禅宗に大きな興味をおぼたようだ。そしてもちまへの行動力から、禅を学ぶために1950年代はるばる京都にまでやって来る。すなわち1956年5月から1957年8月までと1959年以降1967年までの二度である。この間に彼は日本女性、上原^{まさ}雅と南方の諏訪之瀬島に自から建設したアシュラムにおいて結婚している。その時の式の模様は彼のエッセイに見ることができる。

マサ上原とわたしは島で八月六日新月の日に結婚した。アシュラムの全員は前夜おそくまでおきて、翌朝のためのべんとうをつくり——村からの贈物のすばらしい赤タイをやってきた。——中略——われわれは四・三〇におきて暗がりのなかで、やぶの道があるきはじめた。まず峡谷へおり、こんどはジャングルのなかをナイフの刃のような尾根にむかってジグザグにのぼった。五時までにはジャングルをぬけて、熔岩のむき出しの坂に出た。ながい尾根にそっていくと、むかしの、死んだ噴火口があり、それから主噴火口のふちと頂上についたのは日の出の直後だった。——中略——噴火口のふちに立ってホラ貝を吹きならしマントラをととなえた。火山と海と空の神々にショーチューをささげ、マサとわたしは伝統的な三度のさかずきをかわし——ボンとナナオがなにかしゃべり、マサとわたしがしゃべった。わたしたちは「四つの誓い」をいっしょになえ、おわりにホラ貝を三発吹いた。風のこないところへいってリュックをあけて、ゆうべつくったべんとうを食べ、のこりのショーチューをのんだ。われわれは頂上からおりて十一時にはバンヤンの木のところまできていた——すぐそのまま海へ行き泳いだ。⁽¹⁾

「岩のしとね」

マサに

雪溶けの池 あったかい花崗岩
 夜営だ、ここで、他にどこを探そう。
 うたた寝 想いをすべて風にゆだねて。

なだらかにかたむく床岩、
 空 と 石、

優しさを 僕に教えておくれ、

とらえがたなき触れあい——
 かすめ飛ぶまなざし——
 ちいさな歩み——
 それこそ遂には 固い大地を優しく包むもの。
 雲むすび 霧あつまり
 青ねずみ色に降りそそぐ 夏の雨すだれ。

紫に星かすむたそがれ
 すすり合うお茶；
 沈みゆく新月、
 愛することを学ぶのに
 なぜ こんなに永くかかるのか、
 僕らは 笑い
 心いたむ。⁽³⁾

ところでスナイダーは山に大変ゆかりがある。山への愛情が強く、若い頃からアメリカの山々を歩き、高山での森林監視人やきこりを経験している。その他タンカーに乗り組んだり、インドのアシュラムに出かけたり、世界環境会議に参加したり、また他方、寒山詩を英訳し、インディアン文化の研究にたずさわるなど非常に勤勉かつ積極的な人間である。以下においては彼の詩をいくつかとりあげ、スナイダーの詩の世界について考えてみたいと思う。

I. 岩の世界

PIUTE CREEK

One granite ridge
A tree, would be enough
Or even a rock, a small creek,
A bark shred in a pool.
Hill beyond hill, folded and twisted
Tough trees crammed
In thin stone fractures
A huge moon on it all, is too much.
The mind wanders. A million
Summers, night air still and the rocks
Warm. Sky over endless mountains.
All the junk that goes with being human
Drops away, hard rock wavers
Even the heavy present seems to fail
This bubble of a heart.
Words and books
Like a small creek off a high ledge
Gone the dry air.
A clear, attentive mind
Has no meaning but that
Which sees is truly seen.
No one loves rock, yet we are here.
Night chills. A flick
In the moonlight
Slips into Juniper shadow:
Back there unseen
Cold proud eyes
Of Cougar or Coyote
Watch me rise and go.⁽⁴⁾

「パイユート クリーク」

花こう岩の尾根ひとつでも
ただ一本の樹でも
あるいはほんの石ころひとつでも、小川でも
池にうかぶ木の皮でも
それだけあれば充分だ。
うちつづく丘陵、折り重なりねじまがり、
このわずかな岩の割れ目いっぱい
根を張る したかな木々、
すべてを照らす大きな月、みんなもうたくさんだ。
心はさまよう。百万の
夏、静かな夜気、あたたかな岩。
果てもなく続く山と空
人界のちりはすべて
消え失せ、かたい岩もふるえるような
重くきびしい現実でさえ
この胸の熱いたぎりをくじけはしまい。
言葉も本も
高い岩だなから流れ落ちるクリークのように
空中にあとかたもなく消えてしまった。
クリアで注意深い心にも意味はない。
見る心は見られる心。
岩が好きなわけではないが、僕たちはここにいる。
夜は凍る。
月光のなかで
なにかがヒュンと跳んで
ジュニパーの茂みの中にすべりこむ
どこか見えないところで
クーガーかコヨーテの
冷たくてプライドな眼が
僕が立ち上がり 立ち去るのを
背後から見ている。

スナイダーの詩の世界を第一に特徴づけるイメージは、岩である。彼を育てたロッキー山脈の岩である。この巨大で厳しい環境が彼の詩の背景にはある。彼は20代の頃、合衆国の北

西太平洋岸の無人の山中で森林監視人をしたことがあり、彼の著書『地球の家を保つには』（*Earth House Hold*）の最初の項目である“Lookout's Journal”はその記録である。人界から遠くはなれ、真夏でもストーブを必要とする高山での岩と雪ばかりの厳しい生活がそこにはある。「パイユート クリーク」はまさにこの環境を描いたものである。無人の丘陵（岩山）が果てもなくうち続き、「言葉も本も」、人間の小さかしい知恵も努力も、その前にはすべて無に等しい。圧倒的な存在としての自然。自然は、日本人がしばしば感じるように疲れた人間をやさしく包むものではない。ワーズワースの自然のように詩人に神聖な靈感をあたえてくれるものでもない。またインドのように燃えるような宇宙のダンスもそこにはない。アメリカのこの自然は人間を拒否し、人間の理解を超えて、冷たく傲然とおし黙っている。そしてその場にいあわせる人間を救われ難い孤独と恐怖に追いこむ。

アメリカの自然は一般に厳しいものであり、人間は生きるためにこの自然と常に戦ってきたという。金関寿夫氏は人間と自然の間に生じる必然的な対立こそアメリカ人の自然観なのだと言及する。

人間と宇宙との間の非連続性を最も端的に述べた古い言葉に、パスカルの「無限に広がる空間のもつ永遠の沈黙が私の心を恐怖で満した」というのがある。これは勿論「神なき世界」を暗示したものだだろうが、ちがった意味で、この言葉は、アメリカ人の自然観をはからずも代弁している。アメリカ人と自然との間には、恐⁽⁵⁾しい深淵が横たわっているからである。

そしてさらに続けて、この現実ゆえに、アメリカ人はかえって自然との絆を積極的に求めつづけてきたことを彼は指摘している。こうした伝統的な衝動とスナイダーの詩が直ちに結びつくかどうか即断はできない。しかし「パイユート クリーク」には少なくとも生命へのあこがれを読みとることができる。彼はこの沈黙の世界でプライドをもって生きるクーガーあるいはコヨーテのかすかな気配を感じる。誇り高いこの動物たちは彼に近寄ってくるはずもない。が、人の恐れるこの動物に彼は自分をじっとみつめている同じ生命のぬくもりをおぼえる。孤独な環境の中で生命へのいとしさを学んだ故か、あるいは彼がもともとそうした資質の詩人であるからか、スナイダーは動物描写が巧みだ。雪の原野や岩山でも鹿やリスは生きている。同じ生命体としての共感を、人間に対するように動物たちにもおぼえる時、自分をとりまく世界の孤独な様相はたちまち優しいものに変化するだろう。

Ⅱ. 山と仏教

先にも述べたようにスナイダーは日本に長く滞在し、禅を学び修業したが、わが国の仏教的な詩人、宮沢賢治に心酔して彼の詩を何篇も英訳している。その一篇に『春と修羅』第一集中の「くらかけ山の雪」がある。

「くらかけ山の雪」（宮沢賢治）

たよりになるのは
 くらかけつづきの雪ばかり
 野はらもはやしも
 ぼしゃぼしゃしたり黝んだりして
 すこしもあてにならないので
 まことにあんな酵母のふうの
 朧ろなふぶきではありますが
 ほのかなのぞみを送るのは
 くらかけ山の雪ばかりです⁽⁶⁾

THE SNOW ON SADDLE MOUNTAIN (translated by Gary Snyder)

The only thing that can be relied on
 is the snow of Kurakake Mountain.
 fields and woods
 thawing, freezing, and thawing.
 totally untrustworthy.
 it's true, a great fuzzy windstorm
 like yeast up there today, still
 the only faint source of hope
 is the snow on Kurakake mountain.⁽⁷⁾

日本のウェットな雪がスナイダーの感性を通過して、ロッキーの雪の感触に変わってしまったような観があるが、彼自身は賢治を根本的に自分と同質の詩人としてとらえている。

ところで山の詩が前の章からふたつ続いたが、スナイダーの詩の世界を特徴づける二番目のイメージとして「山」をあげることができる。彼は険しい岩をよじ登り、岩の割れ目を跳びこえ、凍った谷をすべり降り、早朝の山歩きを楽しんだりする。ジャック・ケルアックの小説『達磨行者』(*The Dharma Bums*)にスナイダーをモデルにしたジャフィーという青年が登場する。この中でジャフィーがレイという名の若者（ケルアック自身がモデル）を連れて登山する箇所がある。読者はそこで生まれながらの登山家ジャフィー（スナイダー）の面目躍如たる姿に接して、おそらく驚嘆することだろうが、同時に小説のテーマとして重要なことは、ここで山が宗教的ヴィジョンを開示する場となっていることだ。ジャフィーとレイがかなり高く登って人界を離れた岩山に孤独に無防備に立たされる時、初心のレイは岩の

存在（大自然の力）に圧倒されおびえるのだが、そんな彼にジャフィーは落ちついて仏教的世界観を説いて聞かせる。すなわちこの山そのものが仏の顕現であり、仏である山は何十万年も我々を沈黙の中で辛抱強く見守り、我々のために祈りつつけているのだという。別の説明を加えるならば、自分たち人間もそれをとり巻く岩も本質的に同一のものであるから（あらゆる存在は同じ仏性を持つものであるから）いずれにしても人間と岩との対立関係はそこには存在しない。こうして人間を拒み圧倒する岩も、仏教的世界観を受け入れた時、我々との共感可能なあたたかいものに変化するのだ。レイはこうして、「自己と他者の対立」という西洋文明がその根底にかかえている恐怖からようやく救い出されるのだ。

スナイダーはこのように仏教的世界観に生きていて（彼にとってはこの世界観はヨーロッパ中世の神秘思想やインディアンのシャーマンの世界にも通じるものなのだが）、その立場から現代の世界を圧倒的に支配している西洋文明が落ちこんでいる誤謬を指摘してみせる。

ところで彼の思想を既成の宗派に分類することはできない。つまり彼を純粋な禅徒であるとか、仏教徒であるとかは言えないだろう。そして彼自身もそうしたことにはこだわってはいないだろう。おそらく彼の思想は自分の心のイメージに忠実に古今東西のあらゆる思想をごたませにしたものだ。しかし彼をいいかげんな詩人と呼ぶことはできない。彼の詩も発言も、全体的に一貫した明確な信念に貫かれている。そのあまりの明確さ、迷いのなさにあるいは不満をもつ読者がいるかもしれない。また彼が表現において仏教的（東洋的）ヴィジョンを支持するのに積極的であり、このヴィジョンが彼の内的世界を形成していることは決して否定できない。スナイダーの初期の代表作である次の詩を見てほしい。

RIPRAP

Lay down these words
 Before your mind like rocks.
 placed solid, by hands
 In choice of place, set
 Before the body of the mind
 in space and time:
 Solidity of bark, leaf, or wall
 riprap of things:
 Cobble of milky way.
 straying planets,
 These poems, people,
 lost ponies with
 Dragging saddles—

and rocky sure-foot trails.
 The worlds like an endless
 four-dimensional
 Game of Go.
 ants and pebbles
 In the thin loam, each rock a word
 a creek-washed stone
 Granite: ingrained
 with torment of fire and weight
 Crystal and sediment linked hot
 all change, in thoughts,
 As well as things.⁽⁸⁾

「割りぐり」

これらのことばを置きなさい
 あなたの心の前に石を置くように。
 しっかり置きなさい、両手で
 場所を決めて、置きなさい
 心のかからだの前
 空間と間時の中で。
 木の皮や葉っぱもあれば壁もある
 すべて割りぐり。
 銀河の中の小石、
 さまよい出た星たち、
 これらの詩、たくさんの人間、
 道に迷った小馬たち
 くらをひきずりながら――
 また岩の上のしっかりした道。
 この世は果てもなく続く
 四次元世界の
 碁のゲームのようなもの。
 浅い土に棲む蟻と小石
 すべての石はことばに等しい
 流れに洗われた石
 また御影石、火と重力に鍛えられ

水晶と堆積した土砂を熱がしっかり結んだ石

物質と同じように

すべては思念の中でも変化する。

「この世は果てもなく続く四次元世界の碁のゲームのようなもの」だと彼は言う。あらゆるものが複雑にからみあって時間と空間の中で進行していく世界。もろい「葉っぱ」とかたい「壁」、迷えるものと安定したもの、巣をつくり生活する「蟻」と沈黙した「小石」、両極端の性質をもつもの同士が共存しあるいは融合し、(ひとつひとつの碁石が碁盤の上の世界を形成しているように) そのひとつひとつの要素が集まり全体となって、時間と空間の中で我々が住むこの世界を形成している。この世界は、水晶と土砂が熱と力を得て御影石に変化するように、あらゆる現象が複雑にからみあい、たがいの影響のもとに変化していく綱の目であるという(この詩に見られる)この思想は、完全に大乘仏教的なヴィジョンなのだ。またこの詩においては彼の好みのイメージである岩と、彼の宗教的ヴィジョンとが巧みな結合をみせているといえる。

結 び

スナイダーが好むのは生きた宇宙だ。それはありとあらゆる存在が(岩であろうが動植物であろうが)同じ大地の上で、同じ空の下で、平等に存在の権利を認められ、共存する世界だ。欲望のおもむくままに自然環境を破壊しつづける現代文明はやがて生態系のサイクルを乱し、最後には自からの手で自からの首をしめる結果になるだろうと彼は言う。彼は現代人にエコロジーを学ぶことをすすめる。また自然界と神秘的な交流をもち、自然界との一体化の中に生きていた原始の知恵に我々は学ぶべきだとも言う。そこには原始社会を理想とする思想がある。たとえば現代アメリカ人はかつて自然との調知の中に生きていたインディアンの知恵を借りて、エゴの欲望の危険な手からアメリカ大陸を護らねばならないと主張する。これについては、例えば1975年にピューリッツァ賞を受けた彼の詩集『亀の島』(*Turtle Island*)を参照してほしい。彼の作品の中で常に示されるのは生命への愛であり、我々の共通の故郷、地球への愛である。愛を通じて、あるいは恋する女とのセックスを通じてすべての存在と一体化し、そこに開示される宇宙の真理に触れたいと望む。それはまた、インディアンのシャーマンやインドのヨーガやタントラまた西洋中世の神秘思想等に彼が示す関心とも一致するところだ。

山を愛し、岩に生命を見出し、すべての生命と共にこの大地に生きることを願う、それがゲイリー・スナイダーという詩人なのだ。

BY FRAZIER CREEK FALLS

Standing up on lifted, folded rock

looking out and down—
 The creek falls to a far valley.
 hills beyond that
 facing, half—forested, dry
 —clear sky
 strong wind in the
 stiff glittering needle clusters
 of the pine—their brown
 round trunk bodies
 straight, still;
 rustling trimbling limbs and twigs

listen

This living flowing land
 is all there is, forever

We *are* it
 it sings through us—

we could live on this Earth
 without clothes or tools!⁽⁹⁾

「フレイジャークリークの滝にて」

隆起と褶曲の岩に立ち
 我が身乗り出し見降ろせば——

流れ 遙かの谷に落ち
 谷の彼方は 乾いた 半ば緑の丘
 ——透明な空
 固い松葉のきらめく房ぶさ
 吹き分ける強い風、
 ざわめきゆるる大枝小枝
 丸い 狐色した松の幹

まっすぐに身じろがず
さあ 聴くがよい。

これは
生命ながれる大地
すべてはここに、とこしえに

我らは それ
我らを通じ 歌うもの

衣服，道具を持たずとも
この地球に生きんかな⁽¹⁰⁾！

Notes:

- (1) ゲイリー・スナイダー著，片桐ユズル訳，『地球の家を保つには—エコロジーと精神革命』（東京：社会思想社，1975年），pp. 246～247.
- (2) Gary Snyder, *Turtle Island* (A New Directions Book, clothbound, 1974,) P. 64.
- (3) ゲイリー・スナイダー著，サカキナナオ訳，『亀の島』（東京：「亀の島」を発行する会，1978年），P. 80.
- (4) Gary Snyder, "Piute Creek" in *The New Oxford Book of American Verse* (Chosen and Edited by Richard Ellman, New York: Oxford University Press, Fourth printing, 1980), pp. 1024～1025.
- (5) 金関寿夫著，『アメリカ現代詩ノート』（東京：研究社，1977年），pp. 202～203.
- (6) 宮沢賢治著，草野心平編，新潮文庫『宮沢賢治詩集』（東京：新潮社，1969年），P. 14.
- (7) Gary Snyder, *The Back Country* (A New Directions Book, 1968), P. 115.
- (8) Gary Snyder, "Riprap" in *The New Oxford Book of American Verse* P. 1025.
- (9) Gary Snyder, *Turtle Island* P. 41.
- (10) ゲイリー・スナイダー著，サカキナナオ訳，『亀の島』，P. 51.